

# 田遊び祭りの概念

折口信夫

青空文庫



一 田遊び・田儼ひ・田楽

日本には、田に関する演芸が、略三種類ある。第一は、田遊びである。此行事は、余程、古くから行はれたものと思ふ。次は田儼ひで、此も、奈良朝以前既にあつた。第三は、平安朝の末に見え出して、鎌倉に榮え、室町に復活した、田楽である。

田遊びは又、春田打ちとも言ふ。所によつては、此を暮れに行ふ事もあるが、多くは正月に行ふので、現在でも、新旧の正月に此を行ふ地方が、まだ方々にある。勿論現在行はれて居るものは、いろいろ形が變つて了うたものが多いが、東京附近では、赤塚村

の諏訪神社で行はれるものが、一つの典型的な形と見られる。

田儺ひに就いては、古い文献もある。日本紀に、天智天皇の十年五月、群臣と西小殿に宴して、此を御覧ぜられた事が出て居る。田儺ひの名が、ものゝ上に見えて居るのは、此が最初であるが、実際はもつと、古くからあつたに相違ない。

しかし、此田儺ひは、早く民間を離れて、宮廷のものになつて了うた様だ。少し後れては、雅楽寮の諸師の員数を定めた中に、田儺師幾人を置く、と規定した官符などが見られるほどで、其頃になつては、最早、民間の行事ではなくなつて了うて居たと思はれるが、やはり此は、元は五月の田植祭に關したものが、いつか宮廷に採り入れられて、舞ひぶりで、変化させられたのだと思ふ。

田歌を、田儺ひの歌詞であつたと見るのには、問題がある様だが、此二者には、どうも関係があるらしい。其を見ると、三四月の候に行はれる、鎮花祭の歌と殆、同じものだ。尠くとも、田儺ひは、その行はれた時期から見ても、五月の田植ゑから出た事が考へられる。その雅楽化したものだ、と見ていゝ様だ。

## 二 田遊びと田楽との関係

田楽は、此後に出て来たので、平安朝の末頃から、田遊びと田楽とが、並行して行はれて居る。此問題では、親友・畏友達の間にも、賛成して貰へない様な点があるのであるが、栄華物語の中に、

田遊びの事が出て居る。此も、解釈がいろ／＼に岐れて居る。

またでむがくといひて、あやしき様なるつづみ、こしにゆひつけて、笛ふき、佐々良といふ物つき、さま／＼の舞ひして、あやしの男ども歌うたひ、ゑひて心地よげにほこりて、十人ばかりあり云々。

とある。此でむがくは、鼓の名だとする説がある。尤、鼓にもあつて、其は田つづみとも言ふが、此場合の文章では、此は鼓の事ではない。「田遊び」に並べて、「また田楽といつて、人員十人ばかりが、さま／＼の舞ひを舞うた」ので、「田遊び」と「田楽」とが、同時に並んで行はれた、一つの例と見られるのである。一口に言へば、五月田植ゑの際に行はれた、田遊び（歌舞<sup>アソビ</sup>）が、

平安朝の末に、呪師<sup>ノロシ</sup>出の法体芸人の手に移つて——当時の民俗  
 芸術の影響をうけて——変化したもの——或は合体したと見ても  
 いゝ——演芸化したものが、田楽であると見ていゝ。勿論、此演  
 芸化には、種々な原因がある。すべて民俗芸術の成立は、たつた  
 一つの原因からばかりは見られない。いろ／＼なものが関係して、  
 其を作り上げて居る。

田楽はさうして、元の形からは変つたものが出来たのであるが、  
 田遊びは、元のまゝのものが残つたのだ。前の栄華物語を見ても、  
 タアルジ  
 田主・翁・高足駄などが中心となつて、行事が行はれて居た。  
 かやうに田遊びは、一方民俗芸術化して、田楽と言ふものになつ  
 たが、而も此二つが、並んで行はれた。大山寺絵巻では、田遊び

と田楽と、此二つの交つたものが描かれて居るが、やはり此二つは、並び行はれたものだと思ふ。田楽が出来ても、其為に、田遊びが忘れられたとは、考へられない。また田遊びが、簡単に田楽に變つたのだなども申されない。

### 三 田遊びの意味

田遊びのあそぶは、古い用語例では、鎮魂を行ふ為の舞踊を言うたのだが、其後、意味が段々變つて、主としては、樂器を用ゐるものに就いて言ふ様になり、後には、野山に狩りをする事をまで、此語で言ふ様になつたが、元來は、鎮魂の為の舞踊を意味した語



で、田遊びとは、とりも直さず、田の鎮魂術を行ふ事だったのである。此考へは、恐らく間違ひがない、と今の自分は信じて居る。田遊びは、余程古くからあつたが、古くは、此を行ふ時期はいつであつたか。普通には、五月田植ゑの時と云ふが、私は、さうは思はない。此式の行はれたのは、年の始めか、旧年の暮れに取り越して置いたのである。其が、其だけでは、効果が薄い様に考へて、さなへを植ゑる時に、もう一度此を行ふ様になつた。だから、元来は田植ゑの時にはなかつたものだ。此には、証拠がある。

春の初めに、其年の一年中の田の出来栄えを見せて置く。此が、此行事の起りである。其出来栄えは、誰が見せたか。神——遠来の神——であつたとも、其神の命令に従ふ土地の神であつたとも、

或は、さうした遠来の神の命令があるので、為方なしに土地の精霊が、誓約のしるしに、此を行うて見せたのだとも考へられる。あちこちの地方で行はれて居るものを見ると、此が殆、混同して行はれて居る。しかし、大体に於いて、かういふ風にしろと見せて行くのと、私の方では、かういふ風に致しますとして見せるのと、此二つの様である。勿論、さう論理に合ふ様には、どこでだつて行うて居ない。

とにかく、この行事は、神或は神の資格を有するものによつて行はれる。その神は、尉と姥との形をして来るのが普通であるが、ところによつては、違ふた形のものもある。東北地方では、妖怪の姿に變つて居る。大黒・夷の出る地方などもある。神樂では、

この尉と姥とが、猿田彦と鈿女とに変つて居るが、この二人に變つたのには、訣がある。それは、此二人が擁き合ふところがあるからだ。此二人の役の主たるところは、其点にある。昔の人は、其を見て、ほがらかな喜びを感じたのだと思ふ。

#### 四 田遊びに出る翁と媼と

歴史の上では、この尉と姥とに就いて、たつた一つだけ、似た例のあるのが、見られるやうである。近世まで跡を引いた、民間に伝承せられた民俗の方では、爺婆の出て来るのは、殆普通の事になつて居るのに、文献では、たつた一つしか例がないのだ。神武

紀に書き残された、椎根津彦と弟シヒネツヒコ 狷オトウカシとの二人が、香具山のハニツチ 埴を大和の代表物として、呪する為にとりに行つた話に、其が見られる。椎根津彦は、簀笠を着て翁になり、弟狷は、簀を被つてヤッ 媼に扮し、敵中を抜けて、使命を果たとする。従来、弟狷は男の様に考へられて来たが、此は女性の神巫ミコ だつたのである。兄が君主で、妹が最高の神巫である場合が多かつた。昔から、此二人が村々を訪問した。其が長い後まで、農村に伝承せられて、遂に尉と姥との形にまで變つて残つたのである。

田遊びの行事は、この翁媼の二人が、中心となつて行はれる。代かきの真似をする。雪をならして、松葉を植ゑる。処によつては、「もう穂が出た」など、褒め言葉を言ふ。かうして刈り入れま

での所作の演ぜられるのがほんとうなのだが、其一部だけを行うても、効果はあると信じた。

此春田打ちは、田の精霊を鎮める為に行うた。其鎮魂術の舞踊が、後世に残り、五月、早苗を植ゑる時に、もう一度、これを行うた。もう一度翁が出て来て、踏み鎮めの舞ひを舞うた——或は、踊りを踊った。翁に対して、タアルジ田主——太郎次など、変りもした——

が出る。此を田の持ち主と解釈する人もあるが、実は、田の精霊カタドを象形つたものだと思ふ。この二人が中心となつて、いろ／＼な行事を行うたのだが、その中に、此が段々芸能化されて、田樂が出来た。勿論、田樂が出来たには、他にいろ／＼な原因があるので、此が直接に、変化したのだとは言はれない。

地方を歩いて見ると、田楽と称するものにも、いろ／＼なものがある。円陣を作り、編木サ、ラを用ゐるのがある。竹馬に乗つたり、曲芸の様な事をしたりするのがある。又、田楽能を主にして居る処もある。此中、どれが田楽であるかなどは、容易に言へない。田楽と称せられるものを、かなりあちらこちら見て歩いたが、要するに、平安朝の末から、鎌倉・室町へかけて、段々内容のふえて来たものゝ、其中の一部分だけを行つて居るので、決して、円陣を作つて、編木を用ゐるものだけが田楽である、などゝは言はれないと思ふ。さう信じなければ、地方の総てのものが、解決出来ない。田楽の出来たには、沢山の原因があるのだが、先、田舞ひ——此は古い。と言うても、書物の上で古いと見られるのだ――

―と同じ道を歩いて、此田楽も出来たのだと言ふ事だけは、見当がつく。

田楽には、念仏の要素が、多分にある。踏歌の節会の姿も具へて居る。此が宗教化して、念仏宗の発達する、非常に大きなものになつて居るので、念仏宗の恍惚状態は、田楽と共通して居る。併し此には、長い説明を要するので、今は省く。

## 五 田遊び行事の種々

### かまけわざ

田遊びには、いろいろな行事が行はれるが、その中心になつて居

るものは、翁・媼の所作である。それから、田畑の行事には、性的の聯想が出て来るので、カマケワザ感染所作がある。田ばらみ——此は、地名にもなつて居る——の行事がある。又、さをとめが出て来る（今日実演される赤塚村のものにも、此を呼ぶ式があり、同所では、子供が出来ることになつて居る）。此は、顔を包んで、神と一緒に為事をするものなので、沢山出て来る訣なのだ。頭髮を深く、布・帯の類で顔を包み、其上に、赭土・白粉で隠すのが、本態である。

此さをとめに対しては、性的の行事を伴うて居るところが多い。地方によつては、此中の主なるものを、田の泥にまみれさすのがある。田の神への犠牲として、生埋めにした名残りだ、と言ふ説



があるが、私はまだ、其は信じられないで居る。

さをとめの出ない処では、子守りが出る。初めの所作を略して、結果だけを見せるのだと考へると、解釈はつくと思ふ（赤塚の田遊びでは、よねぼと言ふのが持ち出される。男子の生殖器に、手足が出来たのだと信じられてゐる様だが、生殖器に、手足の出来るのは、をかしい。やはり子守りの形だと思ふ。勿論、此が生殖器に変化したには、理由はあるのだ）。

### かけひ

田楽の方では、此らの行事が芸能化されて居る。狂言になつて行くので、其もとが、田遊びにあるのだ。此だけの事は、今も方々に残つて居るものから、断言出来る。実際に其証拠が残つて居る

事は、書物の上に、たつた一箇所出て居る事よりも、確かだと言へる。書物は、総てのものを記録して居るわけではない。殊に、田舎のものなどは、見逃し勝ちである。

狂言になつて行くものを、かけひとなづける。

### 鬼と天狗と

先、田遊びには、鬼が出る。時には、此が同時に天狗である事もある。昔は、この二つは同じものだつたので、鬼なり天狗なりが出て来て、田遊びを助成するしぐさがあつたのだ。ところが、民間の習はしの情ないことには、鬼・天狗と言ふ名に囚はれて、却つて此を邪魔する奴だ、と解釈する様になつた為に、今では、此らのものを降伏させる儀式が生れて居る。勿論、さうなつて行つ

たには、神と精霊との争ひ、精霊の降伏といふ、古い事実が印象されて居る、と見られる点もある。其でも、地方によつては、鬼と呼びながら、此を大切にしていゐるところもある。結局は、鬼も天狗も、大切なものだつたので、尉と姥と、同じ形のものだつた。だから、田楽では、天狗が大切なものになつて居る。此から、高時の天狗舞ひの様な、修羅物が出来て来たのである。

### 獅子と駒と

次に、獅子と駒とが出る。此二者も、元は農村を護るものであつたのだが、今では両者とも、悪いもの・妨げをするものと解釈されて、降伏させる形になつて居るのが多い。

此は、呉<sup>クレ</sup>楽にまで溯つて見なければならぬと思ふ。呉楽が段々変

じて、田楽に採り入れられ、大神楽にもなつたので、今では、悪魔を退散させるものゝ様でもあり、悪魔そのものでもある様な、訣の訣らないものになつてしまつてゐるが、此の出て来るにも、種々な意味があり、多くの変化があるが、其種の一つは、鹿である。古くは、鹿・猪、共にしゝと言つた。肉シの供給者の意である。さうして、鹿は、農村を荒す動物の代表物と見られて居たので、随つて、悪霊の代表とも見られ、此を謝らして、農作の保証をさせる所作が、古くからあつた様だ。

日本の芸能の上では、此が面白かつたと見えて、いろ／＼なものに、其が採り入れられて居る。鹿と獅子との合同した跡は、極めてはつきりして居る。決して突然に、あんなものが出来た訣では

ない。勿論、此鹿の謝罪誓約が、獅子舞ひの全部ではない。鹿の降伏する所作を持った舞ひの上に、獅子舞ひが入つて来たとも見られる。とにかく、古く日本の芸能に、鹿の謝る所作を持ったものゝあつた事だけは、万葉集を見ても訣る。万葉集には、鹿の謝る歌が、長歌に一首、旋頭歌に一首と二首も、それがある。

駒は、獅子に対する狛犬コマである。今は神社にだけ残つたが、元は、貴族の間に使はれて居た。其が今日では、狛を駒と解して、馬の形に變つてしまつたから、訣が訣らなくなつて了うた。さうして、獅子と共に、降伏するのか、悪魔払ひなのか、訣らぬものになつて了うたのである。

## 牛の代かき

次に牛が出る。此は、田の神——水の神と同じもの——の犠ニムなのだ。或は、田の神の為に働くものであつた。後には、実際に耕作の助けをしたので、行事にも、代かきに出る事になつてゐる。古くは、田の神の犠として大切にされたので、牛の肉を喰べた為に稲虫が発生した、など、言ふ附会説が出来たのも、やはり此が、神の食物と考へられて居た、印象から出て居るのだと思はれる。

### 神と精霊との問答

田遊びの行事は、此らのものが、掛け合ひの形をとつて行はれるのが普通であるが、此掛け合ひの代表的なものと見られ、特別なものと見られるのは、尉と姥の掛け合ひである。ところによつては、媼おきなが出ないで、翁おきなだけが、二人或は三人出るところもある。

此は、一人は田<sup>タアルジ</sup>主——田の精霊——で、もう一人は、此精霊を降伏させ、田の物成りの保証をさせに来る、遠来神である。能楽では、此二人が、白尉・黒尉で表され、外に千歳が出る。能楽の千歳は、若衆型で行はれる。

此神と精霊との間に、神授・誓約の問答のあるのが、古い姿であったと思ふが、今は、いろ／＼に變つて居る。しかし結局、田の害物が除かれて、物成りのよくなる約束が、出来る事になるのである。

### 群行・練道

更に此行事で、注意しなければならぬ事の一つは、此をやる役者が、其附属して居る家は勿論、寺や社へ、其土地を褒め、田畑を

褒めに、寺や社へ練り込む事である。田楽では、此が中門口となつて残つたのだが、此は、日本の宗教・芸術の発達の上では、見逃す事の出来ない、大きなものゝ一つである。

此は、服従の位置にあるものゝ、大きな為事になつて居た。此服従者は、寺の場合には、羅刹神——仏教擁護の神——と言はれて居る。大きな神社には、必附随して居るので、麻陀羅神などゝも言うた。

赤塚の諏訪の社は、相当に古い社だと思ふ。此所では、此服従者が、十羅刹女神と謂はれて居る。だから、世間からは、こゝの田遊びを、十羅刹女神の春祭りだ、と考へられて居た様だ。恐らく此行事が、十羅刹女神の祠から、練り出す形で行はれたのだらう



と思ふ。勿論、今は忘れられてゐる。だが其でも、此祠の前で、天狗の吠える式があるらしい。日本の神道では、神の叱りと言ふものが、大切な事になつて居た。古い信仰の印象が、さうした形で残つたのだと思ふ。

田遊びは、初春の行事であつたのが、元の形である。其が、五月に繰り返され、更に七月にも行はれる様になつて、愈盛んになつた。五月田植ゑの時に移し行はれたのは、如何にも、実感に適するからであつた。七月に行はれる様になつたのは、稲の穂の出る時であり、また、不安の伴ふ時期であつたからだと思ふ。要するに初春の行事だつた、春田打ちの延長と見られるのである。



# 青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 3」中央公論社

1995（平成7）年4月10日初版発行

底本の親本：「『古代研究』第一部 民俗学篇第二」大岡山書店

1930（昭和5）年6月20日

初出：「民俗芸術 第二卷第九号」

1929（昭和4）年9月

※底本の題名の下に書かれている「昭和四年六月二十九日、郷土研究会講演筆記。昭和四年九月「民俗芸術」第二卷第九号」はフ  
ァイル末の「初出」欄、末尾注記欄に移しました。

※底本では「訓点送り仮名」と注記されている文字は本文中に小書き右寄せになっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2007年5月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 田遊び祭りの概念

折口信夫

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>